

経済と経営 30-3 (1999. 12)

〈論文〉

リーダーシップ・ハイスクール
 —— 私立大学との提携により
 高大一貫教育をめざすチャーター・スクール ——

うのうら ひろし
 鵜 浦 裕

一 はじめに

最初に、サンフランシスコ統合学校区（以後 SFUSD と表記する）がこれまで認可したチャーター・スクールを簡単に見ておく。

インターナショナル・スタディーズ・アカデミー・ハイスクール（以後 ISA と表記）がチャーター・スクールへの転換を SFUSD 教育委員会に申請したのは、1993 年 5 月だった。それまで同校は生徒数 600、同学校区内ではリーディング 3 位、ラングイッジ 5 位、数学 7 位の従来校だった。同年 6 月 23 日、SFUSD 教育委員会は全会一致で、現職教員 90%以上の署名を備えた、ISA のチャーター・スクール申請を認めた。これによって、カリフォルニア州では 20 番目となるが、同州都市部初の、そして SFUSD 初のチャーター・スクールが誕生した。

それから 1 年間の準備をへて、1994 年秋同校はチャーター・スクールとして出発した。スティーブ・ヒラバヤシ校長のもとで、教員、生徒、父母のグループが練り上げた申請書には 2 つの新しい試みが盛り込まれていた。1 つは教員免許をもたない専門家の雇用。ヒラバヤシ校長によれば、「州の教育法

が教員免許を要求しているため、やりたくてもできないことがたくさんある」という。たとえば、国際金融取引や外国為替の専門家をコンサルタントとして1、2日お願いすることはできても、専任として1学期分お願いすることは許されない。もう1つは教室外の学習を卒業単位として認めること。現行法では、生徒は教室内でおよそ1,000時間(64,800分)過ごさなければならない。新生ISAは現地社会の機関で40時間のボランティア・ワークを実施し、その1部を卒業単位に認めることにした。

これらの新しい試みは、州の教育法の適用外となるチャーター・スクールになることで初めて可能になった。さらに、およそ\$2,000,000の学校予算の使い道をみずから決定する権限をも与えられた。しかしこうした「独立」と引き換えに、財政的な責任を負うため、ISAは教科書、備品、カフェテリアの食料の費用、配水管工、電気屋、カウンセラーを独力で調達することになった。

ところが最初のチャーター契約更改にあたる、5年目の1998年、SFUSD教育委員会はその更改を拒否した。理由は2つあった。第1に、ISAは生徒にたいし意味ある教育を提供していることを証明できなかった。じっさい統計的データや質的データを見ると、ISAの業績はチャーター・スクールになる前より悪くなっていた。第2に、多くの父母が不満を持っていた。この2つの理由から、SFUSD教育委員会が調査した結果、出席率の低下や停学者数の増大などが判明した。確かに停学はどの学校にもあるが、1度にたくさんの停学者が出ていると、学校側の管理体制になにか問題があるのではないかと考えられてもしかたがない。

しかも一部の生徒が武器を持ちこんだため、学校から全員を退去させる事件が起こったが、ISAは予防措置をまったくとっていなかった。こうした管理体制の不備もあって、SFUSD教育委員会はチャーターを撤回したという。

SFUSDのウェブ・サイトを見ると、依然チャーター・スクールとして紹介されているが、現在インターナショナル・スタディーズ・アカデミーは従

来校としてもどされている。つまり、SFUSD 初のコンバージョン型のチャーター・スクールは明らかに失敗し、チャーター拒否の、カリフォルニア最初の例となったのである。

コンバージョン型のチャーター・スクール設立は、もともとある施設を利用できるだけに簡単そうに見える反面、その運営は意外と難しいのかもしれない。もともからいるスタッフが結果責任をはたす緊張感もなく、もとのままの気分で運営してしまうこともあるからだと言われている。インターナショナル・スタディーズ・アカデミーの失敗はまさにこのケースである。

SFUSD 2 番目のクリエイティブ・アーツ・チャーター・アカデミーは、1993 年に認可され、翌 94 年に開校した新設の、つまりスタート・アップ型のチャーター・スクールである。

その後 SFUSD は 1996 年に認可を再開し、翌 97 年から 4 校のチャーター・スクールを開校させている。

その内エジソン・チャーター・アカデミーは、業績不振に悩むトーマス・エジソン・エリメンタリー・スクールをエジソン・プロジェクトという公立学校運営を仕事とする民間企業が引き受けた、コンバージョン型である。この民間委託については、SFUSD ではその認可の段階から現在でも賛否の議論がおさまっていない。

ゲイトウェイ・ハイスクールは大学受験に必要な学力をつけるための、スタート・アップ型のチャーター・スクールである。ただし生徒の 25% は学習障害をもつ。このようにハンディを背負う子どもたちにも受験に必要な教育を与えるものとしては、全国初の公立高校である。

ライフ・ラーニング・アカデミーは、保護観察下または収監されるべき少年を対象とした、スタート・アップ型のチャーター・スクールである。トレジャー・アイランドの同校では、生徒たちは朝 7 時半頃迎えに来た車で登校する。学校は朝の 8 時半から夜 8 時半まで続き、その後また車で送られる。生徒たちの 1 日がこれだけ長いのは、彼らが収監中の身であり、学校外にい

る時間を極力少なくしなければならないからである。同校については、私が面会したあらゆる人たちが訪問を薦めてくれた。

そして本論でとりあげる、リーダーシップ・ハイスクールはサンフランシスコの市民的なリーダーの育成を目的とする、スタート・アップ型のチャーター・スクールである。同市ダウンタウンの私立大学ゴールデン・ゲイト・ユニバーシティのキャンパス内にあり、同大学の将来構想であった教育学部創設との関係が深いものである。それでは同校について、さらに詳しく見ていこう。

2 開校まで

1996年12月、サンフランシスコ統合学校区教育委員会はリーダーシップ・ハイスクールのチャーター申請を認可した。申請によると、同校は同統合学校区の他の公立高校の平均より低いドロップ・アウト率と欠席率、高いテスト・スコアを「結果責任」として公約している。

ミッション・ステートメントによると、同校の目的は一流の教育を与えるだけでなく、有能なコミュニティー・リーダーを育てることにある。そのため次のような価値観を強調するという。

個人への関心

多文化的な感受性

厳しい学問と十分なサポート

先進科学技術

リーダーシップの養成

同校のビジョンを練り上げた校長就任予定者マーク・クシュナーは、「私たちの使命は単に学科を教えるだけでなく、コミュニティー・リーダーを養成することだ」と新聞インタビューに答えている。そして「この目標を達成す

るために、必要な教員を集め、小規模クラスを用意する」と続けた。ちなみに、同統合学校区の公立高校の1クラス平均30名にたいし、同校の申請は1クラスを25名としていた。

さらに、結果責任を示す方法としていろいろな標準テストの受験を約束している。教育委員会への恭順を示すこの態度は、おそらく認可のために必要だったのだろう。同校理事会メンバーには、教育委員会メンバーであるダン・ケリーの名前もある。

サンフランシスコ統合学校区の最初のチャーター・スクール、93年のインターナショナル・スタディーズ・アカデミーは不祥事を起こし、2番目のクリエイティブ・アーツ・チャーター・アカデミーは94年設立以来標準テスト受験を拒否していた。そのため、同教育委員会は認可に二の足を踏んでいた。じっさい、それ以来3年以上申請を1つも認可していなかった。

したがって、今回のリーダーシップ・ハイスクールの認可はいわば青天の霹靂と言ってもいいくらいであるが、前2校の校長にくらべ、同教育委員会に恭順を示すマーク・クシュナーはまさに「優等生」だった。彼は言う。「予想よりはるかに難しいことでしたが、私には強い確信がありました。チャーター・スクールという新しい組織改革によって、子どもたちを助け、成人を助け、そして公立学校システムを救わなければならないと思いました」と。

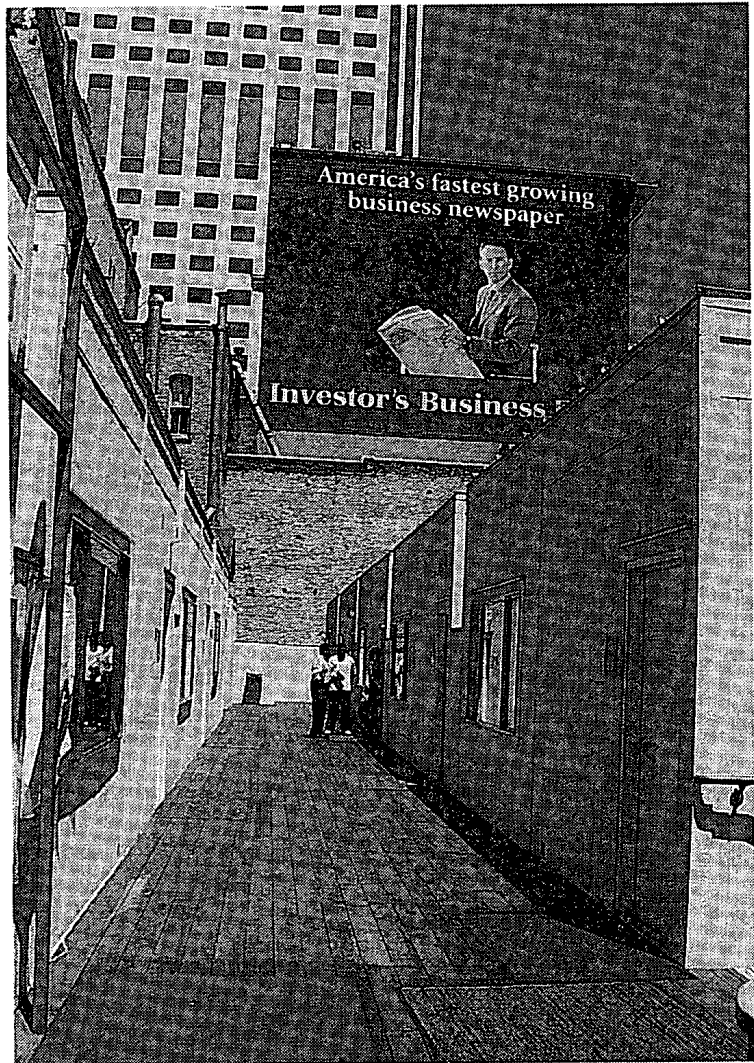
開校直前、1997年夏、クシュナーはパイロット・プログラムを実施した。午前中には英語、数学、環境科学のクラス、午後には報酬をとまなう仕事プロジェクトを提供した。クシュナーによれば、「夏の終わりには、13歳の子どもも大人と同じような行動をしていた。自分で企画し、自分で実行する。ハンターズ・ポイントに植樹したグループもあれば、小学生に環境問題を教えたグループや環境について政治家にインタビューしたグループもあった」という。

1997年9月、リーダーシップ・ハイスクールが開校した。サンフランシスコ統合学校区では、チャーター・スクールとしては3番目、新設チャーター・

スクールとしては2番目、新設チャーター・ハイスクールとしては最初のものとなった。ちなみにカリフォルニア州では122番目だった。

場所はサンフランシスコ・ダウンタウンのど真ん中、ゴールデンゲイト・ユニバーシティのキャンパス内である。大学ビル6階のスペースを借りての開校だったが、その後キャンパス内の組立式バラック校舎に移っている。

その現在の校舎は、高校と聞いて私たちが想像するイメージからかけ離れている。それが私の第一印象だった。ビル群に囲まれた手狭なキャンパスの中に建てられた、異様なバラックが2棟、校舎はそれだけである。まるで被災者のために建てられた一時避難所のようなものである。しかしこの最低限の施設のなかで繰り広げられる多彩なカリキュラムを知ると、同校運営者のアイディアに脱帽せざるをえない。



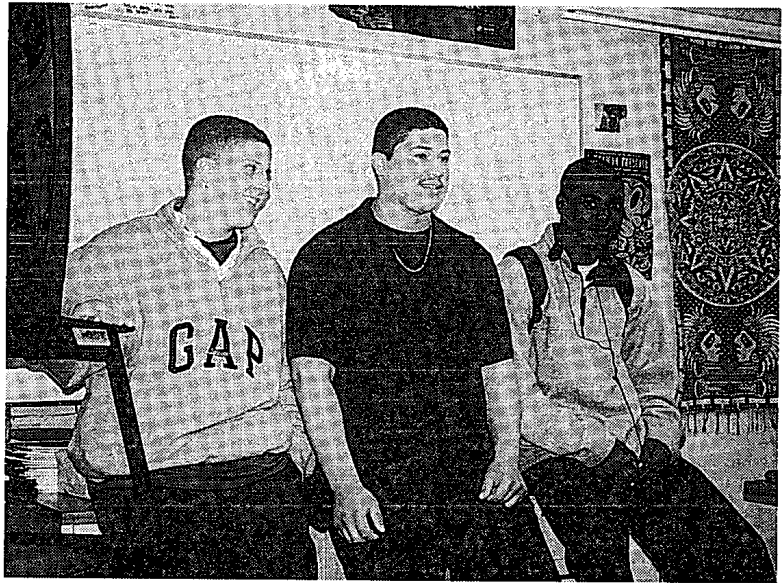
同校では2000年までに各学年100名、合計400名の生徒が在籍する予定だ、とクシュナーは言う。

わずか2棟の組立式校舎

初年度の105名はすべて第9学年で、経済的にも人種的にも多様な背景をもつ。アフリカン・アメリカンとヒスパニックがそれぞれ4分の1、アジア・

パシフィックが20%, そして白人が30%である。ただし白人のなかには、ロシアやウクライナから来たばかりの移民がかなりふくまれている。

その5分の1はオークランド、バークレイ、デイリー・シティーの公立、私立、教区学校など、約30校から転入してきて



左からカルロ、デイビッド、ジャック

いる。もちろんサンフランシスコ統合学校区にとっては毎年1人につき約\$5,000ドル(州からの給付金)増収となる。

入学するためには、願書とエッセイの提出が必要とされる。審査の基準としては、前の学校の成績より、出席と学習への意欲が重要視される。

またクシュナーは300人の志願者のなかから数名の教員を選んでいる。博士号をもつ者1人、修士号2人、学士号3人である。これから毎年7名ずつ増員していくという。

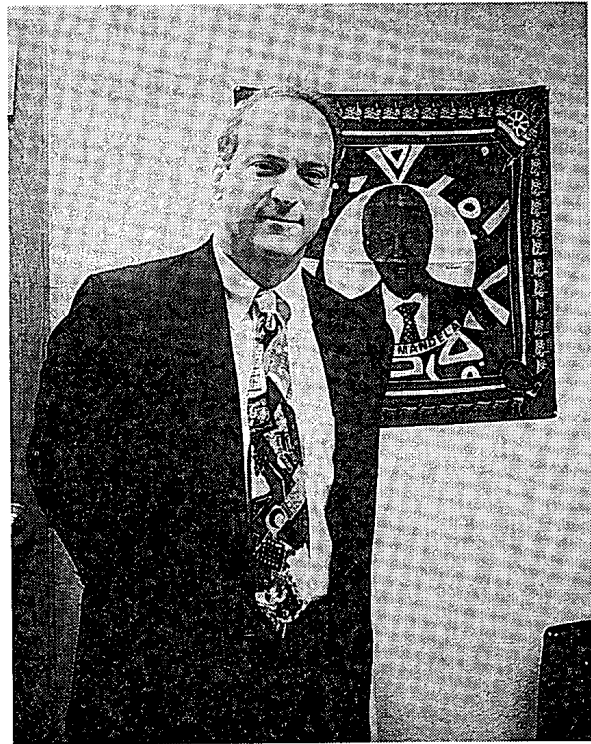
3 「起校家」マーク・クシュナー

チャーター・スクール法が各州で制定されるにつれて、アメリカ公教育は起業家ならぬ「起校家」花盛りの時代を迎えている。現在同校校長をつとめるマーク・クシュナー(1961年生まれ)は、まさにこの時代の申し子といふべき存在である。放課後テニス・チームのコーチもする彼は、経歴を次のように語ってくれた。

かつて私は高校の英語教員でした。そのあと弁護士になりましたが、学校で教えたことが忘れられず、都市部の大きな公立高校で法律を教えたり、私立高校の非常勤講師を兼任していました。そのうち教育への情熱が再び強くなったので、ハーバード大学ケネディー・スクールのマスター・コースに入り直しました。チャーター・スクールのことを知ったのは、その時です。

ちょうどその頃、カリフォルニアやマサチューセッツで同制度ができたのです。それはレッド・タイプ（官僚的な形式主義）を廃止し、公立学校システムを救う方法だと知り、熱心に研究しました。そのあとサンフランシスコにもどり、いくつかの財団からスタート・アップのための寄付を受け、チャーター・スクールを実践することにしたのです。

彼は文字通りチャーター・スクール制度の礼賛者である。「チャーター・スクールのいいところは、公立学校の精神と民主主義的な価値観を保持しながら、私立学校の柔軟性をあわせ持つことです」と。チャーター・スクールを礼賛する人、あるいはチャーター・スクールを運営する人にはいくつかのタイプがある。第1に、公立学校システムに「競争・選択」という市場原理をどうしても導入したいと考える人々。その典型はノーベル賞経済学者ミル



マーク・クシュナー

トン・フリードマンである。またエジソン・プロジェクトのように公立学校運営を仕事とする民営企業の人たちがそれにあたる。第2に、自分が理想とする教育を実現するために献身的な努力を惜しまない人々。彼らこそ「起校家」と呼ばれるにふさわしい。ほかにも、私腹を肥やす山師タイプや宗教的な傾向の強い人たちもいる。

クシュナーは校名の由来を次のように説明する。

リーダーシップ・ハイスクールの名前の由来を説明しましょう。ハーバード大学で学んだとき、行政学部には1つの研究グループがありました。教育、行政、医学、ビジネス、公衆衛生の学部や学科から教員が週1度集まり、「ドリーム・スクール、パーフェクト・スクールとは何かをはじめ、理想」を議論しました。教育のいろいろな部分に意義をもたらし、コミュニティーの人々にとって重要なテーマをさがしました。ハーバード大学で私はハイフェッツ教授の「リーダーシップ・プログラム」に入っていました。これが彼の本です。これがリーダーシップというアイディアの芽生えでした。

私たちはそれについて議論を始め、いくつかの名前を考えました。たとえば、リーダーシップ・コミュニティー・ハイスクール、リーダーシップ・チャーター・ハイスクールなどです。

しかし重要な決め手はその名前がサンフランシスコにフィットするかどうかです。サンフランシスコにはアクティビズム、つまり革新的な運動体の歴史があります。ノンプロフィット・オーガニゼーションの歴史もあります。さらにビジネスをはじめいろいろなセクターにリーダーシップがあります。セルフ・リーダーシップという言葉もあります。このようにいろいろなセクターのリーダーシップを育てるという意味で、単純にリーダーシップ・ハイスクールと名づけました。

四 私立大学との提携

ゴールデン・ゲイト・ユニバーシティー学長（1997年当時）トーマス・M・スタウファーは、同大学がコミュニティーで果たすべき役割を慎重に計画していた。同大学のその将来計画の1つに、「教育的リーダーシップと指導技術をめざす」という項目があった。されに基づき、同学長は教育学部の創設を考えていた。リーダーシップ・ハイスクールとの提携はこの計画実現に向かう第1歩だったのである。

リーダーシップ・ハイスクールを立案し、現在校長を務めるマーク・クシュナーは、同大学の「教育的リーダーシップと科学的教授法の開発」計画を知り、スタウファー学長にアプローチした。互いの計画を確認した後、両者は相互利益をめざし提携することに合意した。

一方で、ゴールデン・ゲイト・ユニバーシティーの将来の教育学部にとって、同高校はいわば「実験校」となる。そこで同大学教育学部の学生は自分が学んでいることを実践することになるだろう。他方では、リーダーシップ・ハイスクールの生徒は同大学の最新コンピューター設備、一流の図書館設備、その他の大学のもつ設備を使う。これによって、同高校から同大学への進学がスムーズになるという副産物がある。さらに、チャーター・スクールとしての同高校と提携することで同大学はカリフォルニア州の教育改革の最前線に立つことにもなる。

このタイプの提携には日本でも大きな可能性がある。教員養成の私立大学が文部省の公募型新研究開発指定校制度を利用し、近隣の公立高校と同様に提携し、お互いの環境を互恵的に使う。大学生は教員研修として高校を使うだろうし、高校生は大学の授業で単位を取得し、振り替えてもよいし、大学入学後の卒業単位として先物買いするのもよい。児童教育に特色をもつ私大が近隣の公立の小学校や幼稚園と提携するのもよい。大学にとっては、幼稚

園は実験室であり、幼稚園にとって大学図書館は児童文学をはじめ教材の宝庫となる。

リーダーシップ・ハイスクールでは、特定分野の専門知識をもつ人であれば、財界や学会の人を誰でも講師として雇うことができる。ほとんどの教員が教員免許をもっているが、教員免許は教員資格の1つにすぎず、決定的なものではない、とクシュナー校長は考えている。リーダーシップ・ハイスクールの使命は、一流の教育を提供し有能なコミュニティー・リーダーを養成することだ。

パートナーシップが始まると、サンフランシスコの民間セクターはリーダーシップ・ハイスクールのサポートに参加しはじめた。個人の寄付にくわえて、コレット・ファウンデーション、マッケソン・エンプロイイー・ファウンデーション、ルーズ・アンド・クロード・ローゼンバーグJr・ファウンデーション、ウェルネス・ファウンデーションをはじめとするサンフランシスコの財団から寄付があった。

同大学メイン・キャンパスの真後ろにあるスワロー・ビルディングは、数年まえ同大学に寄付されたあと、倉庫として使われてきたが、改修された今日では、同大学、同高校共用の学生センターとして使われている。同センターは改修のために最大の寄付をした個人の名にちなんで、エドワード・S・アジェノ・センターと呼ばれている。彼の寄付が呼び水となって、ハースブスト・ファウンデーションなど他の大口寄付があった。改修によってできた教室は、昼はリーダーシップ・ハイスクールの生徒が使い、夜間はゴールデン・ゲイト・ユニバーシティーの学生が使っている。

このようにゴールデン・ゲイト・ユニバーシティーはリーダーシップ・ハイスクールとのパートナーシップを通して、コミュニティーにつながっている。

両校の生徒と学生が慣れるまで、両者は問題を解決し、理解と協調の関係をつくりあげる努力する必要があった。同大学学長室のペギー・マクガイアー

室長が両校関係を担当する中心的な人物である。彼女は自信を持って語っていた。「パートナーシップは今イケイケの状態、両校のスタッフや学生はとも積極的に活動している」と。

五 カリキュラム

4年間の外国語必修など、卒業に必要な科目や単位数はカリフォルニア州の大学受験の要件を満たしている。

ゴールデンゲイト・ユニバーシティの施設を利用したコンピューター教育、大学のコンピューター・ネットワークとダウンタウンのロケーションをフルに利用して展開される、ハイレベルの情報技術教育や職業体験は、同校自身の設備の貧弱さを補ってあまりある。

ゴールデンゲイト・ユニバーシティの授業への参加もある。たとえば、同大学の法学部教授バーニー・シーガルはリーダーシップ・ハイスクールの生徒を4人選び、陪審員として大学生が本物の裁判官と学生が弁護士にふんずる模擬裁判クラスに参加させた。彼らは最終弁論を聴き、被告が有罪か無罪かを評決する機会にめぐまれた。訴訟はある店主が泥棒とまちがえて若いアフリカ系アメリカ人を銃で撃った事件である。店主が十分に反省していることもあって、

「陪審員」は店主に無罪だが治療費を負担するという判決を出したという。その1人アミナ・アドフォードムは「魔法のような経験」だったと、大学新聞に喜びを語っている。

またビジネスのクラスにも参



大学での授業風景 (写真は GGU/LSH Gazette, Fall1998 から)

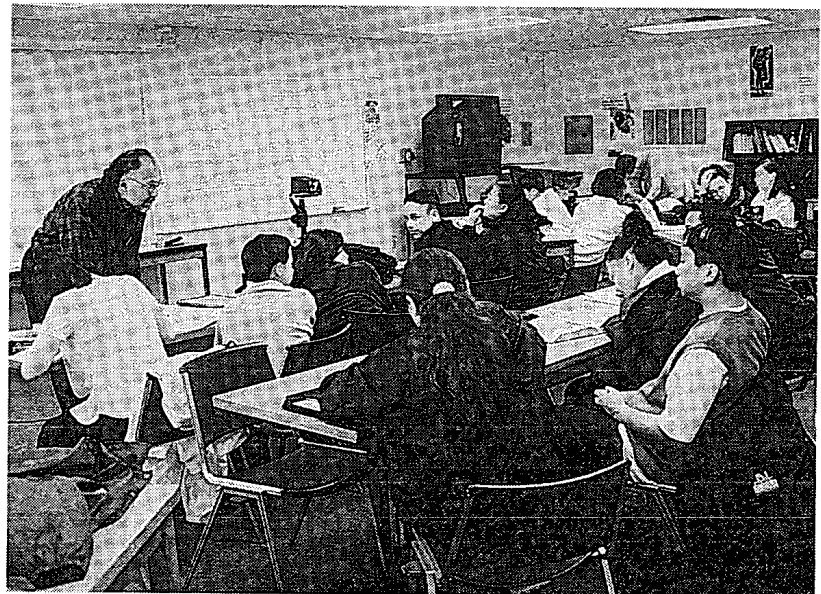
加できる。有能な指導者や経営者には難しい仕事を通して他人をコーチするだけの能力が要求されることを具体的に学ぶ機会となっている。

その他サンフランシスコ市ダウンタウンという立地条件を十分に活かした授業も多くある。たとえば、金曜日の午後に「シティー・ラブ City Lab」という授業がある。サンフランシスコ市やそのダウンタウンには世界的な名所がたくさんあるので、そういう文化的資源や自然環境を利用した授業がおこなわれる。

たとえば、「生命を脅かす病気（エイズのこと）と暮らす」というタイトルの講演を聴いたり、海岸散策、近代美術館など博物館見学、科学アカデミーのプラネタリウム見学などがある。

また中国史や中国文化を学習するために、チャイナタウンへの徒歩ツアーがある。教室で学んだことを自分の目で確かめたり、チャイナタウンの人々にインタビューして確かめたりする。

また「シンク・グローバル・アクト・ローカル」という授業は、コミュニティー・サービスのラブ Lab である。生徒は「スープ・キッチン」、「アフリカン・アメリカン・センター」、「シニア・センター」、「ニューカマー・ハイスクール」をはじめとする8つの場所から1つを選ぶ。たとえば、ニューカマー・ハイスクールを選ぶ生徒には英語を勉強するニューカマー・ハイスクールの生徒のチューターをつとめる奉仕が義務づけられる。他人の学習を手伝うことによ



組立式校舎の教室

て、リーダーシップ・ハイスクールの生徒は忍耐と理解を学ぶ。お返しとして、ニューカマー・ハイスクールの生徒はリーダーシップ・ハイスクールの生徒に中国人の国民性や文化について教える。

このように奉仕を学ぶ機会によって、生徒は教室における学習を体験的に理解し、コミュニティーにおけるその意義を理解できる。

体育実技は近くのYMCAの施設を借りている。

6 終わりに

ゲイトウェイ・ハイスクールと同じように、1つのキャンパスに2つの学校が共生しているケースである。リーダーシップ・ハイスクールがゴールデンゲイト・ユニバーシティーに寄生しているというほうが、正確かもしれない。いずれにせよ図書館、コンピューター・ラブ、オーディトリウム、カフェテリアは共有スペースとなり、使用時間をめぐり調整が必要となる。

しかしゲイトウェイ・ハイスクールの場合とちがい、どちらかといえば静かな場所を求める大学生とはしゃぎ盛りの高校生が同居するため、どうしても前者から苦情が出る。そのためクシュナー校長は規則を設けた。たとえば、リーダーシップ・ハイスクールの生徒が使えるフロアー、エレベーターを制限し、大声で騒ぐことも禁止した。

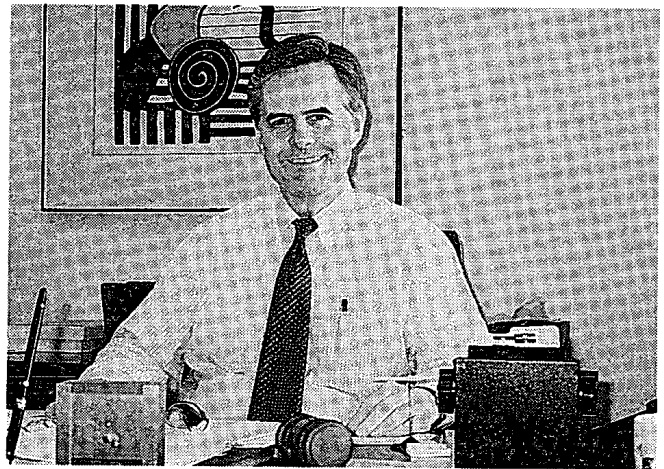
私立大学とチャーター・スクールとのパートナーシップは日本でも有効である。近年では中高一貫教育より、高大一貫教育の動きも見られる。付属高校をもつ私立大学では簡単にできることでも、そうでない大学や高校には難しい。しかし今回のケースのように、私立大学と公立高校が提携することで、お互いに資源を共有し、活性化できることもあかる。日本でも試めされることが期待される。

追跡調査

最近わかった2つのことを記しておく。

1999年11月、ゴールドンゲイト・ユニバーシティー学長室のペギー・マクガイア室長からいただいた電子メールによると、すでに同大学理事会はリーダーシップ・ハイスクールとのパートナーシップを廃止する決定を下したという。そこで同年12月同大学を訪れ、その理由やリーダーシップ・ハイスクールの今後についてピーター・キーン法学部長をインタビューした。

ゴールドンゲイト・ユニバーシティーとリーダーシップ・ハイスクールとの提携が結ばれたのは、数年前、トーマス・M・スタウファー前学長のときです。当時、前学長は教育学部創設を唱えていたのですが、チャーター・スクールを教員を目指す学生の実験室かつトレーニングの場とすることが彼のアイデアでした。もし教育学部ができたときに、全米で注目されているチャーター・スクールがあれば、同大学の魅力になると、前学長は考えていたのです。



ピーター・キーン法学部長

しかし教育学部の新設は単なるジェネラル・プランのままで終わりました。具体的な計画は何一つありませんでした。というのは、ゴールドンゲイト・ユニバーシティー全体の将来計画として、教育学創設を位置づけることはできなかったのです。確かに試みとしてはおもしろいかもしれませんが、しかしこの大学には教育学部を創設するだけの力がありません。

要するに、ゴールデンゲイト・ユニバーシティーの立場からみると、リーダーシップ・ハイスクールとの提携は本末転倒 (putting the cart before the horse) だったのです。すでに教育学部が存在し、教員養成を大学の役割としているのであれば、チャーター・スクールとの提携は学生に絶好の実験室を提供することになったでしょう。

しかし創設以来この大学の一般的目標はビジネス、法律、テクノロジーの分野における成人教育でした。またカリフォルニア北部やとくにベイ・エリアには、カリフォルニア大学バークレイ校をはじめ優れた教育学部をもつ大学がたくさんあります。もしゴールデンゲイト・ユニバーシティーに教育学部創設のためのリソース (資金や人材) があつたとしても、これらの有名な教育学部に匹敵するものをつくるのは難しいでしょう。じっさい、それだけの資金や人材がこの大学にはありません。

したがって、前学長のプランはまったく実現性のないものだったのです。

キャンパス内にできてから、この大学にとってリーダーシップ・ハイスクールはつねに「問題の種」でした。ここはビジネス、法律、テクノロジーの大学院教育を行う場所で、サンフランシスコのフィナンシャル・ディストリクトで弁護士、銀行家、会計士、コンピューター・プログラマーとして働く人たちが専門的知識を学ぶために通っているのです。学生の年齢は 22~65 歳にわたります。こういう場所で高校生との共生がうまく行くはずがありません。彼らは 14~16 歳です。あまりに大きな違いがあるため、両者のあいだにはつねに緊張がありました。「なんで子どもがいるんだ」、「あの子たちは何をしてるんだ」と、ビジネスや法律を学びにきた学生はつねに不平をもらっていました。

確かにクシュナー博士はすばらしい高校をつくりました。これは誰もが認めるところです。カリキュラム、教員スタッフ、生徒たちのい

ずれもすばらしいと思います。しかしゴールデンゲイト・ユニバーシティとの相性はよくありません。

スタウファー前学長にはこのような決定がたくさんありました。そのため今年(1999年)、理事会は同学長の辞任を受理しました。そして、リーダーシップ・ハイスクールはこの大学にふさわしくないという、全学的な判断に基づいて、理事会はリーダーシップ・ハイスクールとの提携を廃止し、同校に敷地の明け渡しを要求しました。ちなみに、新しい教育施設を建設するための土地を必要としていたということもあります。そのために、この春に3千万ドルの募金を始めました。

すでに協議は終わり、ほかに適切な敷地を見つけるという条件でクシュナー博士とは決着がついています。現在、著名なビジネスマンなど、コミュニティ・リーダーからなるサンフランシスコの市民グループがリーダーシップ・ハイスクールのために敷地を探しています。いずれにせよ、来年(2000年)の夏までには、リーダーシップ・ハイスクールはこのキャンパスを去ることになりました。

また1999年12月24日付けの朝日新聞(夕刊, p.18)は、本稿では失敗に終わった、私立大学と公立高校との提携の日本版を紹介している。同紙では、中央大学商学部が公立高校との提携を始めるという、新しい試みが次のように報道されている。

高校生諸君、ひと足早く大学で本格的に勉強してみませんか。中央大学商学部が来年度から、大学の授業に高校生を受け入れる連携教育をスタートさせることになった。履修した授業を、高校側が卒業単位として認定するのが特徴で、高校側にとっては生徒それぞれが進路選択の参考にすることができ、大学側にとっては将来の学生確保に結びつけたい狙いもあるようだ。

「キャンパス・インターンシップ」と呼ばれ、通年コースと短期集中型のゼミコースがある。

通年コースは「経営学」、「金融論」、「消費者行動論」など十科目程度で、高校生を「プレ・スチューデント」として、大学生に交じって受講してもらう。ゼミコースは、夏休みなどに4日間の集中講座を実施する。いずれも教材費を除き無料。

いまのところ、以前からつながりのある神奈川県立神奈川総合、埼玉県立伊奈学園総合、東京都立飛鳥の各単位制高校が対象で、年明けに正式に協定を結ぶ。

高校側は「大学に入れば、こんな講義だということを体験できると思う。高校のほかの授業に影響が出ない範囲で検討したい」（伊奈学園）、「大学を知るだけでなく、より高いレベルの教育を提供してもらえるのではないか」（神奈川）、と意欲的。同学部の酒井正三郎学部長補佐は「大学とはこういうものだ、ということを高校生の段階で知ってもらうことは、大学教育全体としてメリットが大きい」と話す。文部省高等学校課は「大学の教員が高校に出前講義をする例はあるが、大学での授業に高校が単位を認定するのは珍しい」という。

参考文献

- Wilson, Yumi, "Charting a New Course: Leadership High in S.F. Part of Burgeoning Educational Movement," *San Francisco Chronicle*, 7 Feb 1997, p. A21.
- Asimov, Nanette, "Leadership, Learning for Inner City Youth," *San Francisco Chronicle*, 16 Sept 1997, p. A15.
- Legon, Jordan & Michelle Guido, "After Stanford, Clintons Focus on Education, Youth," *San Jose Mercury News*, 21 Sept 1997, p. 1B.
- Allman, Lysa, "Leadership High—Going to High School at the University," *San Francisco Bay View*, 17 June 1998, p. 1
- GGU/LHS, "News and Updates from Golden Gate University/Leadership High

School Partnership,” *GGU/LHS Gazette*, Fall 1998.

鶴浦 裕「クリエイティブ・アーツ・チャーター・アカデミー—手作りの小さなチャーター・スクール」, 札幌大学『経済と経営』, 第30巻, 第1号, 1999年6月, pp. 259-87.

「ゲイトウェイ・ハイスクール—学習障害児のためのチャーター・スクール—」, 札幌大学『札幌大学総合論叢』, 第8号, 1999年10月, pp. 17-38.

「エジソン・チャーター・アカデミー—民間企業が運営するチャーター・スクール—」, 札幌大学『札幌大学総合論叢』, 第8号, 1999年10月, pp. 39-62.

「テnderロイン・コミュニティ・スクール—チャーター・スクールを辞退し, CBOをめざす従来校—」札幌大学『経済と経営』, 第30巻, 第2号, 1999年9月, pp. 245-284.

「チャーター・スクール—来るか 起校家の時代—」, (社)ソフト化経済センター『月刊ソフトノミクス』, 2000年2月号, pp. 9-11.

「ライフ・ラーニング・アカデミー—未成年犯罪者のためのチャーター・スクール—」, 札幌大学『札幌大学総合論叢』, 第9号, 2000年3月(印刷中).

「カリフォルニア州のチャーター・スクール制度とサンフランシスコ総合学校区」, 札幌大学『札幌大学総合論叢』, 第9号, 2000年3月(印刷中).

追記 資料収集については札幌大学図書館のスタッフからご協力いただいた。記して感謝したい。